九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

北伐時の郭沫若

武, 継平
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/5470

出版情報：言語文化論究. 16, pp.15-28, 2002-07-12. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

北伐時の郭沫若

武　　継平

問題提起

日本に留学していた十年間の郭沫若について，わたしは研究結果を『郭沫若—留日十年』（重慶出版社2001年３月）にまとめた。その後，十年亡命期の郭沫若研究に切り替える予定だったが，最近彼の日本に関わるこの二つの十年の間にいくつかの重要な問題があることに気づいたのである。

郭沫若は1924年11月16日に日本人妻の佐藤をとみと子供たちを連れて帰国した後，26年３月18日広州に行くまで上海で創作および評論活動を続けていた。当時広州は国民革命の新しい都で，自由，光明を求める青年や知識人たちの憧れの聖地であった。しかし，広東大学学長陳公博の要請を受けて文系院長として広州に着任した郭は，およそ４ヶ月務めた後，筆を投じて北伐軍の一員となった。北伐の途中，彼は軍総司令官の蒋介石に反旗をひるがえしたせいで，追われる身となり，28年２月24日一家を連れて日本に亡命した。それまでの１年９ヶ月の間，彼は一体何をしていたのか。そして彼の身に何が起きたのか。これらのことを知るために，下記の問題点を中心に北伐期の郭沫若およびその周辺を調べた。

1．郭沫若が国民革命政府の支配下にある広東大学の文系院長を辞して軍人として北伐に参加したのは何故か。そのきっかけは何だろうか？
2．郭沫若が51年の共産党員歴をもっているというのは80年代の新説だが，それが1927年の南昌蜂起の際に既に入党したという根拠によるものである。しかし，彼は一体いつから共産党に接近し，また入党を考え始めたのか。
3．郭沫若は広東大学の教職を得て広州に到着したのが26年３月23日だった。26年７月の北伐開始までは４ヶ月がある。その北伐準備期ともいうべき時期，彼は何をしていたのか。
4．郭沫若本人は自分が北伐に参加する直前はすでに国民党員だったといっているが（郭沫若「記念鄧択生先生」1946年12月上海『中華論壇』第２巻７・８号合併号），彼は一体何時，どこで，そしてどういう目的で国民党に入党したのか。
5．郭沫若は北伐従軍後ずっと軍の総政治部に所属していたということはよく知られているが，そもそも北伐軍の総政治部とはどんな部署だろうか。

1．北伐に参加するきっかけ

従来，郭沫若の北伐参加は自分の意思というより当時共産党広東地区軍事部長，黄埔軍官学校政治部主任の周恩来の世話によるものだとされている。根拠は王廷芳の「光輝的一生，深切的懐念」（『郭沫若研究論集』p４，四川人民出版社1980年６月）と孫席珍の回想記「郭沫若―永遠不滅的光輝」（同書p31）である。前者は，共産党員の陽翰笙と李一氓がまず郭を北伐に誘い，そしてそのことを周恩来に報告した。周恩来は郭が北伐に参加できるなら政治的な影響は大きいといい，早速郭を自宅に呼んでその意志を確かめた。結局周は北伐軍総政治部秘書長を務めていた共産党員孫炳文[1]に，軍総司令官蒋介石と総政治部主任鄧演達に推薦してもらうことに決めた，という筋の話だが，著者は20年以上務めた郭沫若の晩年の秘書で，その回想記というのはそもそも郭本人から聞いたものだという点から考えると，主要論拠としては扱いにくい。

一方，「郭沫若の北伐参加は……共産党組織の決定である。共産党の指導者は何度も彼を動員した」と主張する後者は北伐時郭沫若の部下の証言で，たとえ内容がどうであれ，信用せざるを得ない一面があるように思われる。孫氏の話によると，当時共産党の軍事責任者は周恩来だった。国共合作の北伐だから，軍の宣伝工作に極めて重要な位置付けをした共産党の判断で，周はわざわざ郭を同じ共産党幹部の林伯渠の家に呼び，軍の総政治部に科長として入らせる手配をしてくれたということである。

王氏は回想記の中で，北伐開始後郭の部下として同じ総政治部にいた共産党員陽翰笙と李一氓の勧めにも言及したが，その裏づけとなる資料が無い。しかし，郭沫若本人が28年１月５日に書いた「懐亡友」という詩と1946年11月24日に書いた回想記「記念鄧択生先生」の中で，孫炳文も自分の北伐参加に関わったことに触れている。前者では，

> あの時行動しなさいと勧めてくれたのが君だったね，
> ぼくは大軍に従い気持ちも高揚して中原を北伐していた
>
> ――郭沫若詩集『恢復』，1928年３月創造社叢書

とあり，後者では，

> 「その後私は思い切って政治部に入ったのも主に炳文さんのお勧めによるものだった」
>
> ――1946年12月『中華論壇』第２巻第７・８合併号

と明言している。

さらに，26年当時広東大学三年生で，共産党総支部長だった徐彬如が回想記の中で郭沫若の共産党入党問題を検討する際，同年３月，広東地区共産党委員会の代表として学生委員会委員長惲代英の方から郭に黄埔軍官学校でもいいから軍隊に入ったほうがよいと正式に話を持ちかけたと証言している[2]。その時郭は周恩来とまだ面識が無いので，最初に彼を北伐軍の入隊に誘ったのは，おそらく同年黄埔軍官学校の政治部教官長を務め，中共中央委員だった惲代英であろう。

これで，たとえ周，孫が関与した事実があったとしても，彼らより三，四ヶ月前にすでに惲代英が郭を北伐参加に勧誘したことが明らかになった。惲，周，孫は三人とも郭の北伐参加に直接関与した。おそらくこれが郭沫若が北伐に参加したきっかけであろう。しかし，関与人物は三人とも共産党員だからといって，誘いはあくまでも誘いにすぎない。た

とえそれが共産党組織の決定であっても，郭沫若本人にその意思がなければ，何の束縛力もないはずである。では，そのきっかけが単なる外的要因とすれば，内因＝北伐に参加する本人の動機はなんであろうか。北伐時期の郭沫若はもともとあまり研究されておらず，この問題には郭の国共両党との関係が必ず絡むので，早期の郭沫若の人間像に迫る課題としてなかなか面白いと思うが，なぜかその研究報告が見あたらない。

2．郭沫若の共産党入党について

資料Ａ：「郭先生は1927年八・一南昌蜂起後，行軍の途中で周恩来同志と李一氓同志の紹介で中国共産党に入党した。その党員歴は1927年から数えるべきで，先生が亡くなる1978年まで計51年ある。」

——呉奚如「郭沫若同志和党的関係」，『新文学史料』p130，1980年第２期

資料Ｂ：「郭沫若が1958年に改めて入党するという形で自分が中共党員であることを世間に知らせた[3]。」

——陽翰笙「風雨同舟戦友情—深深緬懐郭沫若同志」，郭沫若故居・中国郭沫若研究会編『郭沫若百年誕辰記念文集』p26，社会科学文献出版社　1994年12月

資料Ａは30年代上海で地下活動に従事していた中共幹部呉奚如の指摘である。発表は郭が亡くなった２年後であった。この呉奚如説は27年郭の共産党入党を証言する唯一の公刊資料らしい。呉氏が郭沫若入党時に立ち会った人物でないことは確かだが，かつて上海中共地下組織の要人だったため，恐らく極秘の党員名簿か何かを見たことがあろう。

資料Ｂは建国後中国文芸聯盟共産党支部長，文芸聯盟副主席などの要職を務めた陽翰笙が93年に書いた回想記の一節である。呉奚如説に関して，根拠を示さない点には不満があるものの，わたしは基本的には疑問をもたない。というより，いったい何年何月何日に入党したのかを追究するより，その時期に入党する郭の動機は何か，そしてその前後の思想および行動にどんな変化があったかなどを明らかにしたほうがむしろ有意義だと思う。

前述したように，呉奚如説は北伐中郭沫若が共産党に入党したと証言する唯一の公刊資料である。しかし，それが世間に公表された３年後，26年当時（北伐開始前）広東大学（後中山大学に改名）共産党総支部長，広東地区学生運動委員だった徐彬如氏が『党史研究資料』（1983年第10期）に「大革命時期我在広州的経歴」を題に回想記を発表し，はじめて郭沫若が同大学文系院長を務めていたころ，すでに大学の共産党支部に入党願書を提出していたと証言した。そして，徐氏は郭の入党志願に対する広東大学共産党総支部の審議意見が学生運動委員会の意見と違っていたことを次のように触れている。

「総支部は検討した上で郭沫若の入党申請には同意したが，学生運動委員会は郭の入党問題をめぐって論議した結果，期間を設けて彼を革命の実践の中で鍛えさせなければならないという結論に至った。両者の審議意見は畢磊（中共広東地区学生委員会委員）[4]によって中共広東地区委員会に報告された。陳延年（中共広東地区委員会委員長）[5]は学生運動委員会の審議意見に賛成した。そして惲代英（同学生委員会委員長）[6]は郭に軍隊に参加させるか或いは黄埔軍官学校に行かせることを提案した。陳延年は中共広東地区委員会の決議

を郭沫若に伝えるよう畢磊に命じ，また惲代英を同委員会の代表として派遣し，郭沫若と一度正式に会見した。郭は党組織の意見を真剣に受け止め，その場で一日も早く軍隊に行かせてほしいとの意思表明をした。」

さらに，84年1月16日に，郭沫若の研究者宋彬玉，張傲卉両氏が26年当時中共広東大学総支部宣伝委員だった韓拓夫氏をインタビューした。そのおかげで，われわれはその『訪問韓拓夫談話記録』[7]から徐彬如氏証言の裏をとることができる。

韓氏はインタビューの中で，次のように言っている。

「郭沫若は広東大学に来てから中国共産党への入党を希望したことがある。広東地区委員会は検討した末，しばらく彼の様子を観察する必要があると判断し，彼に軍隊で鍛えるよう入隊を求めた。」

惲代英，周恩来，孫炳文三人の勧誘はあくまで郭沫若の北伐参加の外的要因にすぎないと前に指摘したが，ここで，彼の共産党入党問題を改めて整理することで，われわれは彼がやっと得た安定した職と地位を捨ててまで軍人になろうとした内的要因を突き止めることができる。結論的にいえば，彼はまさに共産党に入党するために教職を辞して軍人として北伐に参加したのである。言い換えれば，北伐参加は共産党組織が入党を強く希望する郭沫若に与えた試練でもある。彼は創造社同人の中でリーダーシップを発揮し，およそ一週間後の4月13日に書いた「文学と革命」（『創造月刊』第1巻第3期，1926年5月）の中で，「軍隊に行こう，民衆の中に行こう，工場に行こう，革命の渦の中に行こう！」と世間に呼びかけることで共産党の指示に応えた。嘗て文壇に喧嘩腰で登場した創造社同人たちが文筆論戦主義から行動派の実践主義に移り変わった方向転換の裏に共産党の影響が強く働いたのである。

では，次に北伐中の郭沫若の入党経緯を見てみよう。

26年3月23日，郭沫若は広東大学へ赴任するために広州に着いた。到着当日，中共上層部の人物林伯渠に会いに行った。林の自宅にはなぜか毛沢東がいた。その後ほぼ毎日広東大学の校務会議や学生主催の様々な大会に出席している。着任早々，多忙の中で彼は3月末までのわずか一週間の間，大学の共産党総支部に入党願書を提出したのである。党組織は彼の希望を受理したが，結局検討した上で保留という形で北伐の参加を指示した。それで，郭の共産党入党問題は北伐開始前に未解決のまま一段落を迎えたのである。

朱其華の『一九二七年の回想』[8]によると，郭沫若は26年11月，北伐の途中で国民革命軍総政治部江西弁事処（南昌）で再度共産党入党を申しでたが，やはり承認されなかった。結局，彼が正式に入党できたのは南昌蜂起が失敗したあとの行軍途中であった。

3．北伐準備期の郭沫若について

26年4月22日，郭は「我来広東的志望」（26年4月25日広州『革命生活』第5期）という文を書き，広東にくるのは「二つの小さな抱負をもっていたから。その一つは国民革命の仕事において実際に微力を尽くすことで，もう一つは珠江流域の文化にいくらか寄与したいから」と言いながら，「我々のような教育に携わる人間は学生を中心に考えなくてはならない」と述べた。この時点では，大学を辞めるかどうかは，彼はまだ最終的な決心がついていないように見受けられる。

しかし，26年７月21日，彼は北伐開始と共に総政治部宣伝科科長の身分で入隊し，[9] そして家族を広州において北上した４月下旬から７月下旬までちょうど三ヶ月の間，彼の身に何が起きたのか。とりあえず，彼の行動を次のように整理してみた。

まず，彼がその間どんな重要人物に会っているのかを見る。

４月（末？）――国民党左派中心人物の鄧演達とはじめて黄埔軍官学校で知り合う。
（⇒前掲郭沫若「記念鄧択生先生」）

４月（末？）――国民党要人邵子力にはじめて会う。
（⇒郭沫若『帰去来・在轟炸中来去』，1937年11月上海抗戦出版部）

４月13日　――広東大学で周恩来の講演を聞く。
（⇒王廷芳「戦友　兄弟　知音―郭沫若和周恩来在北伐前後」，社会科学文献出版社　1994年12月『郭沫若百年誕辰記念文集』p130）

４月～５月　――東山会の要請で毛沢東，馬伯援と三人で講演を行なう。
（⇒林飛鸞・梅海「大革命時期郭沫若同志在広東」，1980年９月９日『羊城晩報』）

５月５日　――全国労農代表主催のマルクス誕生108年記念大会に出席し，講演を行なった。共産党早期指導者彭湃らに会う。
（⇒「工農両代表大会記念馬克思情形」，1926年５月８日中華全国総工会省港ゼネスト委員会編『工人之路』特集４巻313期）

５月10日　――全国労農代表団歓迎会を司会。労農各界代表，共産党指導者劉少奇と会う。
（⇒1926年５月12日『広州民国日報』）

５月Ｘ日　――毛沢東の要請で，広州農民運動講習所で講演を行なう。
（⇒易明善「郭沫若在広州」，1980年『四川大学学報叢刊』第８輯）

５月Ｘ日　――国民党中央委員柳亜子に会う。
（⇒徐文烈「柳亜子與郭沫若的友情」，『随筆』第９期）

６月中旬　――広東国民政府軍事委員会政治部主任鄧演達の招きで，周恩来，惲代英らと政治部工作会議に出席。
（⇒前掲郭沫若「記念鄧択生先生」）

６月下旬　――共産党員陽翰笙，李一氓に北伐参加の意思を告げる。陽，李はそれを周恩来に報告する。周恩来は郭沫若，陽翰笙，李一氓三人を自宅（広州南華銀行）に呼び，入隊したらどんな仕事をするのかについて話し合う。そして周は北伐軍総政治部秘書長の孫炳文に郭沫若のことを国民革命軍総司令官の蒋介石と総政治部主任の鄧演達に推薦するよう指示する。
（⇒前掲王廷芳「戦友　兄弟　知音―郭沫若和周恩来在北伐前後」）

６月下旬　――鄧演達はわざわざ郭の自宅（東山亀岡）を訪ね，歓迎の意を表す。
（⇒同上）

６月下旬　――画家関良を北伐に誘い，鄧演達に紹介する。
（『関良回憶録』p47-49，上海書画出版社　1984年９月）

７月中旬　――郭に総政治部宣伝科科長のポストと上校階級を与えることに蒋介石は

同意し，郭を接見する。
（⇒前掲王廷芳「戦友　兄弟　知音—郭沫若和周恩来在北伐前後」）

以上は郭沫若が共産党広東地区総支部に北伐参加の要請を受けた３月末から正式に入隊した７月21日までの間の行動を整理して箇条書きにしたものである。この３ヶ月の間，彼は当時国民革命を左右する国共両党上層部の要人たちと比較的頻繁に接触していた。特に国民党左派の代表人物鄧演達から深い信頼を得るまであまり時間がかからなかった。最初軍隊で何ができるかということさえ分からなかった郭は，鄧演達に呼ばれて政治部の仕事に関する構想を聞かれた時に初めて軍隊でやっていける自信をもつようになった。恐らく郭は政軍両界で強い影響力をもつ風雲児の鄧演達に自分の将来を彷彿したのであろう。このような状況の下で，彼にはこれ以上自らの北伐参加を躊躇する理由はなかったのである。

４．郭沫若の国民党入党問題について

郭沫若は自分が嘗て国民党員だったことを，46年に書いた「記念鄧択生先生」という回想記に僅かながら触れていた。時期は北伐開始前，恐らく鄧演達が郭の北伐参加希望を知っていて，まだ蒋介石に推薦していない26年６月下旬であろう。このことに関しては，『郭沫若年譜』や今まで出た数種類の評伝の中で郭本人説を援用しているだけで，立証されたことはない。時期を考えれば，不思議なことに気がつく。そのころの行動や，人との接触などから見てもわかるように，北伐開始前の郭沫若は共産党に急接近し，入党のこと以外余念がないはずであった。彼は一体いつ，そしてどういう動機で国民党に入ったのか。そのころの行動といえば，気になることは全くないわけでもない。たとえば，26年５月29日の『広州民国日報』に彼が広東大学専修学院国民党支部発足会に出席し，講演をしたと報道している。共産党入党審査保留中の彼は何故国民党の支部会に出席せねばならないのか。さらに，彼は６月上旬国民党広東大学総支部が設立した政治研究班の担任教授になっている。このニュースも６月９日の『広州民国日報』に載っている。国民党部の政治研究班だから，当然全員国民党員だろうが，何故担任が郭沫若なのか，これも不自然である。

ここで，郭沫若は一体無党派のままで北伐に参加したのか，それとも国民党員として参加したのかという問題が浮上してくる。先ず後者の可能性を考えてみる。

北伐は中国第一次国内革命の一環で，国共両党の協力によるものである。「聯ソ，聯共，労農扶助」という孫文の国民革命三大政策の第二が共産党との連携である。具体的な協力の仕方については，中国共産党中央党史研究室編『中国共産党大事記』［人民出版社1991年９月］p18の記述によれば，23年６月広東で開かれた中共三全大会で，第三インターナショナルの指示に基づいて，各民主階級統一戦線をつくるために全ての共産党員は個人の資格で国民党に入党することを認めるとの決議をし，「国民党内の国共合作」の方針を正式に採択した。そして，国共両党の関係が極めて悪化した27年７月になっても，中共中央拡大会議で可決された「国共両党関係決議案」の中でなお国民党の指導的地位が認められていた。一方，23年11月に発表された国民党改組宣言の中でも，孫文が提唱した「聯共」政治路線が反映され，李大釗，譚平山，毛沢東，林祖涵のような共産党上層部の幹部が国民党に入党した。つまり国共両党も国民党援助の形で，共産党員の二重党籍を認めていたというこ

とである。現に，26年北伐の時，第一政党である国民党に入党し，民国政府部門の指導者や国民革命軍の政治部将官になった共産党員は数多くいた。

しかし，郭沫若の場合は，他の共産党員の国民党入党と事情が違う。彼は国民党に入党するとき，厳密に言えば，共産党入党が保留されたままの無党派人士であった[10]。それが鄧演達が彼を総政治部宣伝科長の適任者として蒋介石に推薦したときにすんなりと受け入れられた最大の原因ではないかと私は思う。蒋介石は26年３月20日に起きた「中山艦事件」[11]以来，「聯ソ，聯共」政策に叛きはじめ，特に共産党に対する弾圧はエスカレートする一方であった。総政治部宣伝科は彼に非常に重要視されていた部門で，科長のポストはずっと空いたままであった[12]。各軍の政治部では，ポストの大半を共産党員に占められた中で，せめて統帥部門である総政治部の宣伝科は共産党の手に渡したくないという蒋介石の苦慮が窺える。当時知識人や青年の中でかなり影響力のある有名人郭沫若がもし国民党員だったら，蒋介石のお気に入りの人選になることはいうまでもない。

郭沫若は26年３月末広東大学共産党総支部に入党志願をした後，軍隊に行ったほうが良いとの指示を受けた。しかし，１ヶ月後の５月25日，彼は同大学専修学院国民党支部発足会に出席している。党支部の発足会だから出席者は共産党員なら「聯共」政策で代表として招かれる可能性はなきにしもあらずだが，無党派人士ならまずないだろう。この事実を踏まえて考えれば，郭沫若が恐らく26年の４月から５月25日までの間に国民党に入党したのだと推定することができる。そして，新しい資料が発見されるまで推論としてしか成り立たないが，郭沫若の国民党入党も恐らく広東大学共産党総支部の指示であろう。

とにかく，郭沫若は国民党党員の身分で国民革命軍総政治部宣伝科科長として北伐に参加した。27年四・一二クーデターが起きるまでの国共合作の間，共産党は主役でないとはいえ，正々堂々と第一政党の国民党に協力しているので，党員は自分の身分を隠匿する必要はなかった。仮説だが，もし郭沫若が北伐開始前に共産党に入党していたなら，恐らく蒋介石は彼を総政治部宣伝科科長の椅子に座らせなかっただろう。

郭沫若は26年の北伐に参加する前から，翌年蒋介石と反目し，５月10日に国民党南京中央党部常務委員会で党籍を剥奪されるまで歴とした国民党党員だった。国民党中央政府が武漢と南京とに二つに分裂してから再び合流するまで，武漢政府では，郭は影響力のある党と政府の要人（国民党中央委員会委員，中央政府軍事委員会総政治部副主任）として活動し続けていたが，一方国民党右派が支配する南京中央政府では，彼は党内の職務を全て解任され，そして党籍まで剥奪されてしまった上に追われる身となったのである[13]。

５．郭沫若と北伐軍総政治部

中国現代史研究の分野では『国民十五年以前之蒋介石先生』（毛思誠編，香港龍門書店1936年）『包恵僧回憶録』（人民文学出版社1983年）や『第一次国共合作時期的国民革命軍』（張光宇著，武漢大学出版社1989年）などの資料が幅広く使われているが，専ら北伐軍の総政治部のことに触れたものは少ない。『鄧演達』（文史史料出版社1985年２月）という資料集が出るまで，北伐期の国民革命軍総政治部について，「北伐途次」「請看今日之蒋介石」「脱離蒋介石以後」のような郭沫若の自叙伝に書かれてあること以外，詳しいことは知る由もなかった。『鄧演達』の序文によれば，この文史史料出版社は元々中国政治協商委員会の

付属部門で，『鄧演達』という本は国民党左派の代表人物だった鄧演達烈士生誕90周年を記念するために出版した回想記である。執筆者の多くは北伐期の鄧演達と何らかの関係を有した人物で，当時の総政治部で，鄧演達や郭沫若の部下を務めていた人も含んでいる。おかげで，わたしは前述した資料の中にある断片の数々と『鄧演達』の執筆者たちの思い出から当時郭沫若が活躍していた舞台——総政治部の様子をある程度復元することができた。

まず，国民革命軍総政治部とはどんな部門なのかを見てみよう。

『第一次国共合作時期的国民革命軍』（張光宇）によれば，総政治部とは，国民革命軍総司令部政治部のことで，それが各軍にある政治部に直結し，軍隊内の政治工作，宣伝活動および革命軍の占領地における各種の行政事務担当などに当たる[14]。思えば，南昌攻略後，郭はたちまち北伐軍総政治部南昌弁事処の主任に任命された。そこで，地方政府や国民党支部ができる前にその代わりとして地方行政を行なっていた。

一方，軍の政治部だから，やっているのが政治工作だろうというふうに推測されがちであるが，仕事の内容はどうであろうか。

共産党幹部包恵僧は回想記の中で，知られざる事実に言及している。当時蒋介石は軍を率いて北上していく中で，次々と各地の軍閥の支配区域を攻略したが，勝利は必ずしも戦場での戦いによるものではなかった。なぜなら，北伐軍の政治工作による敵軍の投降が多かったからである。実力温存のためにできるなら戦いたくない数少なからぬ弱小軍閥を相手にする政治工作とは，言ってみれば，金銭や地位による買収工作で，一種の取引にすぎなかった。ところが，蒋介石はこのような政治工作を軍全体の政治工作から分離させ，買収工作を何時も総司令部行営と行動を共にしていた腹心参議たち（総司令部参事処に所属する）に一任し，宣伝工作や投降部隊の再編後政治教育などを鄧演達，郭沫若らが指揮をとっていた総司令部政治部にやらせていたのである[15]。

郭沫若の軍人階級に関しては，張育康氏によれば，当時「少校」以下の尉官（大尉，中尉，少尉）階級称号は厳密に管理されていなかった。上官が自分の判断で与えることができるとのことだが，郭沫若の場合は「上校」の階級で従軍したのだから，最初から上官である総政治部主任鄧演達の判断で与えられたのではなく，総司令部から正式な任命辞令が出されたのである。軍内での影響力と行動力が相当蒋介石らに評価されたせいだろうか，１ヶ月後の26年８月24日，湖南の長沙から武昌に向かう時には，彼はすでに総司令政治部「少将」階級の秘書長に昇進し，事実上総政治部主任代理を務めるようになった[16]。さらに２ヶ月後の10月９日，昇進のチャンスが再び彼に訪れ，華東部の重鎮である武昌を攻略した後，彼は国民革命軍総司令の蒋介石から総政治部副主任の正式任命を受け，階級も「中将」に跳ね上ったのである[17]。

北伐当時の総政治部員だった羅伯先（回想記「北伐軍総政治部主任鄧演達」），張育康（回想記「鄧演達先生與軍隊政治工作」）両氏は，総政治部の編制や人員配置および軍閥投降部隊に対する政治教育などについて詳細に書き記している。両文の主旨を次のように要約した。

北伐軍総政治部は，各軍に政治部を設置して全軍の政治訓練を推進することを任務とする。軍以下の各師団にも政治部があり，師団以下の政治訓練を担当する。さらに，各軍，師団の政治部には，主任及び秘書が各一名いるほか，宣伝科，組織科，総務科があり，それぞれ科長が一名，各団，営，連には政治指導員，幹事各一名が配置されている。これら

の人は全部総司令部政治部の管轄下にある。総政治部は常に総司令と共に行動し，北伐の展開につれて，最初の数十人から一時数百人の規模になった。非戦闘員が多いため，警備営，衛生隊が配備された。

北伐軍が広州から出発した時，総政治部主任以下は秘書室，宣伝科，組織科，総務科がある外，『革命軍日報』編集部が付属されている。宣伝科長郭沫若は『革命軍日報』の編集長を兼任していた。武昌占領後，郭沫若は総政治部副主任に昇進した。彼は元の宣伝，組織，総務の三科をそれぞれ「処」に昇格させた上に，多くの帰国留学生と有名人を網羅し，編纂委員会を作り上げ，人員が数百人規模となって，北伐期総政治部の全盛期を迎えた。26年11月北伐軍が南昌を占領した。総政治部主任鄧演達は副主任郭沫若に十数人を率いて南昌で総政治部南昌弁事処を設置せよと命じた。

国民革命軍の軍勢が北上するにつれて，軍閥と熾烈な戦いを繰り返していたが，行く先々で北伐軍の破竹の勢いに圧倒され，戦わずに投降してくる軍閥所属の部隊もあった。彼らは北伐軍に投降の意を表した後，直ちに北伐軍に改編されることになる。軍閥軍隊が革命軍に改編されるというのは軍旗軍服のみを換えるような単純なことではない。北伐軍が彼らを受け入れるために，まずその部隊に政治部を設置し，それを通して士官や兵士たちに政治教育を行なわなければならない[18]。

北伐軍の軍，師団政治部の主任は大半が共産党員か国民党左派か進歩的な知識人であった。当時北伐軍の政治部の一般人員は主に（1）黄埔軍官学校政治科の学生；（2）国民党中央政治研修班の研修生；（3）国内の大学，中学を卒業し，民国革命に参加しに来た青年たちによって補充されていた。「何故革命を起こす必要があるのか，そして何故軍閥や帝国主義を打倒し，腐敗役人を倒す必要があるのか。まずそれを部隊の士官や兵士たちに解ってもらわなければならない。それから彼らに命令に絶対服従すること，規律を守ること，金銭より国家や同胞を愛し，決して死を恐れないこと教え込まなければならない」[19]。

さらに，張育康によれば，北伐当時政治宣伝工作の如何が軍の勝利に大きく関わっていた。北伐戦争が各戦場で次々と勝利をあげることができたのは，次のような勝因三要素があった。

① 労農階級及び一般市民の支持を得たこと。
② 軍閥を倒して新しい国を作る政治的自覚と旺盛なる士気を有すること。
③ 厳正な規則を守っていること。

これらの要素を北伐軍および改編部隊に身に付けてもらうことが各軍の政治部の仕事で，総政治部は各軍の政治部の上に君臨し，指導に当たっている。総政治部では普段様々な『政治工作手引き』のような小冊子やいろいろなパンフレット及び政治教育の教材を各軍に配布し，専属の政治指導員は教師のように毎日兵士たちに政治の講義を行なう。士官以上の軍の幹部に対しては，彼らのために総政治部で作られた宣伝資料を配る。それから様々な形の集会で講演をして軍隊に政治教育を行なう。軍隊の移動となると，政治部の人はまず先発部隊と行動を共にするのが常で，部隊が到達する前に地元の住民に宣伝工作を展開しなければならない[20]。

26年9月9日，郭沫若は総司令部の命令で部下李一氓，朱代傑などを率いて占領したば

かりの漢口に北伐軍総政治部漢口弁事処を設置し，自ら主任となった。10月11日の総政治部会議では総政治部本部を武昌に構えることが決まり，郭は再び鄧演達の右手として働くようになり，翌月７日鄧から江西省九江市に総政治部弁事処を開設せよとの命令を受け，南昌で総政治部贛州弁事処を立ち上げ，主任となった[21]。27年３月14日，総政治部主任の命令で九江に総司令部本部を構えた蒋介石のもとに来ていた郭は総司令部行営政治部主任の総司令部辞令を受けた。

蒋介石は武漢中央政府における鄧演達の「聯ソ，聯共」および農民政策に不満をもち，わが道を行く鄧演達を総政治部主任の椅子から追い払うつもりだったのだろうか，３月のはじめからすでに金と地位で（主任昇進と毎月300元特別手当付）郭沫若を懐柔しようとしていた。この任命は蒋が南京に行くまで極秘扱いだったが，郭はそれを武漢中央政府に報告し，そのまま待機してもうしばらく様子を見よとの指示を仰いだ[22]。３月22日，蒋介石の下を脱出できずに途方にくれていた彼に総政治部上海支部を設立せよとの武漢政府令が届いた。報告を受けた蒋介石は彼に上海に行ってもいいが，「総司令行営政治部」の看板を必ず出せと指示した。郭は総司令部行営政治部主任の昇進任命を受け入れた間もない頃のことだから，この指示は，もともと総司令行営政治部の最高責任者として上海支部の設立に立ち会う，あるいは監督しに行くことを意味する。ところが二日後に，南昌総政治部を上海に進駐させ，それを改組して総政治部上海支部にせよという命令と，郭を改組後の上海支部主任に任命するとの命令が武漢国民党中央執行委員会から同時に出された[23]。蒋介石は南京に行く前に，どっちの命令にしたがえばよいのかという郭の動揺を察したのか，ついに最後の切り札を出し，郭に自分について来さえすれば，江蘇浙江両省を下したら揚子江沿岸６省の政権は任せるとの約束までしてしまったのである[24]。

27年３月31日，上海へ行くために蒋介石のもとを離れた郭は北伐第20軍党代表朱徳の自宅に転がり込んだ。そこで，彼は世間を驚愕させた檄文「請看今日之蒋介石」を書き上げ，それを大至急の機密文書として武漢に届けさせ，公刊したのである[25]。

27年４月12日にクーデターを起こした蒋介石は６日後の18日に，南京「国民政府」を発足させ，公然と武漢政府と対立するようになった。それがいわゆる「寧（南京）漢（武漢）分裂」である。郭沫若は14日に一旦上海に寄り，そこで周恩来の指示を受けた後また15日武漢政府のもとに戻った。「当時南京側では武漢国民政府のことを共産党政権だと宣伝し」[26]，武漢を不倶戴天の敵としていたので，その情報を入手するや否や，４月21日をもって，郭沫若の国民党総司令部特別党部執行委員会委員の職務罷免処分を決定した[27]。一方，武漢政府はその後南京政府に対する権力誇示をするためだろうか，郭沫若に対して，４月21日以後にも次のように一連の新たな任命を下したのである。

① ４月30日，国民中央政府軍事委員会総政治部副主任（４月30日『漢口民国日報』）
② ６月14日，国民革命軍第二方面軍政治部主任（郭沫若「涂家埠」）
③ ６月22日，第四集団軍第二方面軍国民党副党代表（６月23日『漢口民国日報』）
④ ８月１日，中国国民党革命委員会委員，宣伝委員会主席，政治部主任（８月１日南昌で開かれた国民党部分中央委員および各省区特別市海外党部代表連合会議で選出された[28]。

郭沫若の起用をめぐる武漢側の権力誇示はたちまち南京側の猛反発を受けた。4月21日の職務停止処分を追って，5月7日張群，陳立夫，李仲公3人は「郭沫若は平日より共産党に追随し，その言論がしばしば本党に害することがある。殊に最近作<請看今日之蔣介石>一篇は反逆行為に属するもので，欲しいままに中傷誹謗し，事実をでっち上げ，蔣同志がまもなく二三六七各軍を解散すると吹聴している。その挑発離間の手段は残酷極まりない」もので，「極悪非道で，決して許せるものではない」ゆえ，「4月21日よりその執行委員の職務を罷免するのみならず，さらに党籍を剥奪し，全国指名手配をも告示するよう」再び国民党中央党部に上申書を出した。5月10日，南京国民中央政府常務委員会主席胡漢民はその旨を批准し，各部門に執行するよう指示した。つまり，国民党南京中央政府による郭沫若指名手配は27年5月10日をもって実施されたのである。しかし，それはあくまで党内の極秘事項で，当時の機密文書は同じく南京中国歴史档案館に保管されたままで，公表されたことはない。われわれが27年5月23日の『広州民国日報』で見たのは国民革命軍総司令官蔣介石の名義で告示された郭沫若逮捕令であって，南京政府から発布されたものではない[29]。

27年6月上旬，蔣介石は従来の総司令部政治部を総司令部政治訓練部と改称し，呉稚暉をその主任に，陳銘枢，劉文島をその副主任に新たに任命した。その後武漢政府の中でも主導権の所在をめぐる争いが表面化し，6月下旬になって汪精衛を主とする国民党左派はついにそれまで実施してきた孫文の「聯ソ，聯共」政策を放棄することに決め，ソ連総顧問のボロジンを解任した。6月29日，四．一二クーデター以来同じく蔣介石によって指名手配されている元北伐軍総政治部主任鄧演達は武漢国民中央委員会宛ての手紙「告別中国国民党的同志們」を残して，武漢を離れてモスクワに亡命した。厳密に言えば，もともとの北伐軍総政治部はその時点から事実上形骸化したのである。郭沫若も6月半ばころから総政治部を離れて第二方面軍の政治部主任に就任した。その後，彼は中国共産党が指揮をとった南昌蜂起に参加し，自らは国民党の離党宣言を出さないまま周恩来の紹介で中国共産党に入党したのである。

注

1）孫炳文（1885-1927） 四川省南渓県生れ。1922年ドイツに留学。周恩来の紹介で中国共産党に入党。1925年黄埔軍校政治部主任兼教官長。北伐時国民革命軍総政治部後方留守主任。1927年“4.12”クーデター後国民党に投獄され，上海で殺害された。

2）徐彬如「大革命時期我在広州的経歴」，1983年『党史研究資料』第10期。

3）1958年といえば，中華人民共和国は建国してちょうど9年目のころである。社会主義中国誕生前はともかく，その後新政権が立ち上がる際，中華人民共和国政務院副総理，全国政治協商委員会副主席になった彼といい，そしてその後世界平和活動に従事し，国際的な大舞台で活躍した彼といい，身分はずっと「無党派民主人士」であった。つまり，はじめて中国全土支配が達成した共産党にとっては，郭沫若のようなリーダーシップが発揮できる知識人（当時知識人共産党員はかなり少なかったのであろう）が党内より，無党派でいたほうが都合がいいということであろう。しかし，1957年後，反右派闘争の中で共産党の一党独裁に不満を抱いた多くの無党派民主人士

の惨劇を目の当たりにした郭沫若は身の危険を感じたのか，共産党に「再入党」したのであろう。

4）1902-1927，字は安石，湖南省長沙市生まれ。25年共産党入党。中国共産党広東地域委員会学生運動委員会副委員長。1927年4月国民党によって殺害された。

5）1898-1927，安徽省懐寧（現在安慶）県生まれ。22年中国共産党入党。翌年中共広東地域委員会書記。27年中共中央委員，政治局候補委員。同年6月逮捕され，7月上海龍華で殺害された。

6）1895-1931，江蘇省武進県生れ。中国共産党早期指導者。23年中国社会主義青年団中央宣伝部部長，『中国青年』編集長。26年黄埔軍校政治部教官長，中国共産党中央委員会委員。27年8月の南昌蜂起に参加。30年上海で国民党に逮捕され，翌年南京で殺害された。

7）この談話記録は韓本人がチェックしたもので信憑性があるように思われるが，未公刊文献であるために，宋彬玉の別の論文「大革命時期郭沫若同志同党的関係—兼談郭沫若的思想発展」（掲載書：『郭沫若研究』4，p220。文化芸術出版社　1988年4月）で前述内容に関する引用を見ることしかできない。

8）藤井正夫訳・朱其華著『一九二七年の回想』p167，原本は1933年5月上海新報出版社；邦訳本は平成3年11月金精社。平凡社1960年5月初版『アジア歴史事典』第四巻によると，1906～1945，四川省新繁県生まれ。24年浙江省国民党部の幹部。25年広州で黄埔軍官学校，中央党部宣伝部に奉職し，26年国民政府軍人部宣伝科長，27年武漢で第四軍政治部宣伝科長，総政治部宣伝処長。その間，『黄埔潮』『政治週報』『軍人週報』『四軍週報』を編集した。28年広州で，30年上海で逮捕されたが，いずれも数ヶ月で釈放。日華事変開始とともに消息不明。『一九二七年底回憶』の訳者後記によれば，38年後胡宗南に才能を買われ，西安青年政治訓練隊教官となっていたが，45年中共スパイとして処刑されたという。1933年5月に出版されたこの本の中で郭沫若が27年に共産党に入党したと指摘されているが，どうも共産党党史資料として信憑性が問われているらしい。

9）革命軍の北伐は三路作戦を展開していた。湖南，湖北方面は第一路軍；江西方面は第二路軍；福建，浙江方面は第三路軍。主戦場は“両湖（湖南，湖北）”であり，総政治部主任の鄧演達は直接軍事作戦の計画と指揮にあたっているので総司令部にいる時が多かった。主任代理，武昌攻略後副主任に昇進した郭沫若は総政治部を統帥して第一路軍と行動を共にしたのである。

10）国共両党の連携が当時広東大学でいかに実施されていたかは，前述同大学中共総支部宣伝委員だった韓拓夫氏がいう「あの時，共産党員はみな国民党に入党していた。しかも共産党の入党希望者もまず国民党に入って試練を受けなければならない」との回想記で垣間見ることができる。[前掲宋彬玉論文「大革命時期郭沫若同志同党的関係—兼談郭沫若的思想発展」]

11）1926年3月20日，黄埔軍官学校校長蒋介石は「反乱の挙動がある」といって，国民革命軍軍艦「中山号」艦長，共産党員李竜之を逮捕することをきっかけに，広州市にいるソ連顧問の自宅と共産党機関を監視し，黄埔軍官学校の共産党員を全員一時拘束した反共産党事件。

12）前掲王廷芳「戦友　兄弟　知音—郭沫若和周恩来在北伐前後」
13）郭沫若の国民党党籍剥奪に関する公刊資料は未見。しかし，次の秘密公文書が南京中国歴史档案館にある。
　①　1927年４月21日付張群，陳立夫，李仲公が国民党中央執行委員会に提出した郭沫若の党内職務罷免に関する上申書。
　②　同年５月７日付張群，陳立夫，李仲公が国民党中央執行委員会に提出した郭沫若の党籍剥奪および緊急逮捕に関する上申書。
14）張光宇『第一次国共合作時期的国民革命軍』p236～238，武漢大学出版社　1989年。
15）『包恵僧回憶録』（人民文学出版社1983年）p246には，参議として張群，蒋作賓，何成俊らの名前が挙げられている。郭沫若が伝記や小説の中で触れなかったことだが，武昌攻略までの北伐の成功の背後には，蒋介石の政治手腕とブレインとして彼の下で働くこれらの参議たちの買収工作による地方小軍閥の帰順があったことが指摘されている。
16）前掲孫席珍「郭沫若—永遠不滅的光輝」。
17）蒋介石「電鄧演達商量各事」，毛思誠編『民国十五年以前之蒋介石先生』。
18）張育康「鄧演達先生與軍隊政治工作」，前掲書『鄧演達』p77。
19）張育康「鄧演達先生與軍隊政治工作」，前掲書『鄧演達』p78～79。
20）前掲書『鄧演達』p81。
21）羅伯先「北伐軍総政治部主任鄧演達」，前掲書『鄧演達』p66～67。
22）郭沫若「脱離蒋介石以後」，1927年５月７～23日武漢『中央日報・附刊』。
23）1927年４月30日『漢口民国日報』。
24）陽翰笙「談郭沫若研究」，『抗戦文芸研究』1984年１期。
25）「請看今日之蒋介石」という討蒋檄文は従来郭が四．一二クーデターの前に蒋介石の反革命の行為を世間にさらした証拠として扱われてきた。それが27年３月末に書かれたことは事実だとしても，初版本現物が見つからない限り公刊したのが四．一二前だという断定はできかねると思う。現に『郭沫若全集』（13巻）中の初出に関する脚注は「同年４月武漢『中央日報』附刊（単行本）として発表」という曖昧な表現をとっている。一方，郭の自叙伝小説「克拉凡左騎士」（1930）の中で，この檄文は南昌の南湖湖畔（朱徳の自宅）で書かれたが，郭はそれを軍事機密文書として通信兵に武漢に大至急届けてもらい，国民党『中央日報』，『漢口民国日報』および北伐革命軍総政治部部の『革命軍日報』の三大新聞に同時発表されたこと，そして「脱離蒋介石以後」も国民党『中央日報』の「附刊」に発表されたのだが，数回にわたる連載で，しかも最後まで続かなかったという二つのことに言及している。
26）陳公博著・岡田酉次訳『中国国民党秘史』p102，講談社　昭和55年10月20日。
27）同注 13）。
28）張俠『南昌起義研究』p251，上海人民出版社　1982年３月。
29）南京国民政府から出された指名手配命令は1991年『新文学史料』第４期に公開された。指名手配されたのは郭沫若以外に192名共産党員とその容疑者である。

Kuo Mo-Juo in the Northern Expedition

Wu Jiping

Kuo Mo-Juo was continuing creation and criticism activities in Shanghai until he went to Guangzhou on March 18, 26, after he was accompanied by his Japanese wife and children and went back from Japan on November 16, 1924. Guangzhou was the new capital of a national revolution and was the holy place for youths and intellectuals who were searching for freedom those days. However, after he arrived at Guangzhou for a new post as Department-of-literature division manager at Guangdong University for about four months, he put down his pen and joined the national revolutionary army. During the war of the Northern Expedition, he was put on the wanted list owing to having betrayed Chiang Kai-shek, an army supreme commander. For this reason, he had to defected to Japan with his family on February 24, 1928. What did he do? What happened to him? In order to know these things, I investigated focusing on the following problem.

1 Under rule of the national revolutionary government, why did Kuo Mo-Juo resign the department-of-literature division manager's post in Guangdong University, and take part in the Northern Expedition as a military man?
2 Kuo Mo-Juo had the member-of-the Communist Party of China's history for 51 years. It has a ground in the fact that Kuo had joined the CCP during The Nanchang rising in 1927. When did he really approach the Communist Party, and began to consider joining it?
3 Kuo Mo-Juo got the teaching profession of Guangdong University, and it arrived in Guangzhou on March 23, 26. There had been four months until the Northern Expedition started. What did he do at that time?
4 Kuo Mo-Juo said that he was a Kuomintang's member (Kuo Mo-Juo "In memory of Deng Zesheng"). When and where and for what purpose did he join it?
5 As we know, after joining the army, Kuo's position was in the Political Department, but we know nothing about it. What was the Political Department of the National Revolutionary Army?